

創刊号

えとぶり

1999年11月 徳島県青年海外協力協会会報

- 徳島県協力隊を育てる会趣意書（再掲）
- 【特集】協力活動の現場より ～もう一つの隊員活動報告書～
ジンバブエ（西尾正義・堀田直樹）・ザンビア（西条玉恵）
- 協力協会・育てる会活動報告
- 徳島県青年海外協力協会ホームページ開設

徳島県協力隊を育てる会趣意書

徳島県協力隊を育てる会 前事務局長
阿部 仁

宇宙船地球号は、今21世紀を迎え・貧富の格差・人口の爆発・深刻化する環境・人種と宗教・食料とエネルギー・核の管理などいろいろな問題を背負いながら彷徨っていると思われます。

わたしたちの日本では「国際化時代」という言葉が、最も重要なキーワードとなりそうです。この言葉は、大都市や世界的企業のためにあるものではありません。山深い山村や都市に近い町でも、国際化の波は押し寄せています。それは経済的な分野に止まらず、社会・文化・労働・技術など各方面へと及んでいます。国家、そして地域においても、国際化をいかに且つ円滑に進めていくかが重要になってくるのです。

このような情勢の中で、問題解決にあたっては、長期的視野と国際協力という認識に立った理解の中から、世界の国々が確実に、その具体的な処理に取り組む姿勢が重要と考えられます。

このような観点から、わが国は経済先進国・平和国家として、開発途上国の興隆と発展のため、援助と貢献を国策の大きな柱と考え、積極的に取り組んでいます。昭和40年、政府事業として発足した「青年海外協力隊」は、隊員がその技術や技能を生かした人的協力をしながら、開発途上国の国造りに寄与してきました。若い隊員の情熱的な活動は各種成果を上げ、各国からも評価と信頼を受けており、新たな隊員派遣の要請は毎年増加しております。

徳島県の青年が協力隊員として参加し、開発途上国での国造りを通じて豊かな体験と国際感覚を身につけるということは、地球規模で求められている「国際化

時代」への人材育成には、千載一遇の機会であるといえましょう。

しかし、徳島県の協力隊参加の現状は、他の四国3県はおろか、全国対比でも残念ながら最下位グループに位置しています。私たちはこの現状を打ち破り、少なくとも他県並みのレベルに追いつき、名実ともに「国際化時代の徳島」となることを切望しております。

しかしながら、その実現には多くの問題も横たわっています。例えば、協力隊員の派遣は勿論のこと、帰国後の受入れ体制（再就職）、さらにその環境・条件・対応などです。たとえ若い世代が使命感に燃えて、途上国での活躍を夢見ても、日本社会の雇用慣行・終身雇用制度等により、「休職参加」が極めて困難な状況です。さらに、帰国後の再就職への不安などから、協力隊員の選考試験に合格しながら、止むを得ず参加を断念する青年もいます。

地方での国際化の必要性が課題となっている今日、開発途上国への深い理解と強力な実績を持つ青年が定着することは、地元への大きな財産と国際化への武器でもあります。それはやがて地域の活性化・地元の振興・文化発展の起爆剤となるはずですが。

今や、これら協力隊員の増加と地元定着の促進は時代の趨勢であり、その支援の確立は何よりも急務と考えます。

こうした状況をふまえ、若い世代の協力隊への参加をしやすい環境を充実・整備するとともに、派遣隊員の支援や情報の提供、帰国後の再就職の促進等を「徳島県協力隊を育てる会」の目的としたいと考えています。本会は上記の趣旨にご賛同いただいた皆様との協力で、積極的な県民運動を展開し、併せて国際協力の推進の実を上げたいと願っています。

協力隊活動の現場より

このコーナーでは、徳島県出身協力隊員からのレポートを掲載しています。最初に紹介する西尾さんは帰国後、元の職場に復職し忙しい日々を送られています。ジンバブエに派遣中の堀田さんは、青少年教育という最もバイタリティを求められる職種です。本文中にもありますが、日本からの荷物発送についての情報を求めています。ご存じの方はぜひともご協力をお願いします。最後の西条さんは、任地へ赴任する時の様子から始まって、現地での生活について描かれています。偶然にも、今回はすべて電子メールでの入稿となりました。

西尾 正義

平成9年1次隊（NTT東日本より現職参加）
ジンバブエ派遣 電話線路技術

私は青年海外協力隊員として1997年7月から1999年7月までの2年間、アフリカの小国、ジンバブエで活動しました。私は電話線路技術者としてジンバブエに赴きました。

まず始めにジンバブエという国をご紹介したいと思います。ジンバブエは南部アフリカ地方にあり、南アフリカ共和国のすぐ上に位置しています。国土の広さはちょうど日本と同じで、人口は約1000万人です。気候はアフリカというイメージから年中暑いと思われがちですが、雨季と乾季に分かれ、6月から8月にかけては、気温が10度以下になり、さらに湿度がほとんどないためとても寒く感じられます。

ジンバブエはイギリスの植民地だったこともあり、その後白人政権がイギリスから独立し、ローデシアという国になりました。それが1900年代の事です。

1960～70年代にアフリカ諸国が次々と独立していくうちに、ローデシアの黒人層の中にも黒人政権を求める気風がおこり、1980年にジンバブエとして独立しました。このジンバブエという名前の由来は主要部族であるショナ族の言語（ショナ語）で“石の家”という意味です。昔のショナ族の王が石を積み上げたお城（グレートジンバブエ）に住んでいた事からこの名前がつけました。今でもこのグレートジンバブエは残っており、世界遺産に指定されています。

ジンバブエには色々な人種が住んでいます。まず一番多いのはなんといっても黒人で80%以上を占めています。その次が白人、以下インド人、東洋人と続きます。黒人の中にも部族がいくつかあります。しかし、他のアフリカ諸国と違い、部族の種類は主なもの4つくらいでそれほど多くありません。他のアフリカのある国は、100以上の部族で構成されています。ジンバブエの黒人人口で一番大きいのはショナ族で70%以上を占めており、次にンデベレ

族、トンガ族と続きます。各部族とも友好的な関係を保っており、目立った対立はありません。

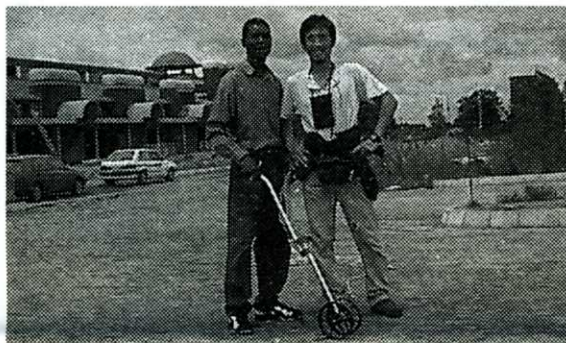
次に私の活動内容について述べたいと思います。私は電話技術者としてジンバブ

エ郵電公社の電話ケーブル敷設計画部に赴任しました。仕事内容は首都ハラレ地区の一つを受け持ち、カウンターパート（相棒）と一緒に電話ケーブルの設計業務を行うことでした。私のエリアはセントラル1と言って商業地区と住居地区が半分づつでした。電話ケーブルの設計とは具体的にいうと、受け持ちエリアを細分化し、その細分化したエリアの電話需要に対して電話ケーブルを供給します。そのために適切な敷設ルートを選び、工事にかかわる費用、材料を決定します。私が協力活動を行うにあたって一番苦労した点は、同僚・相棒との関係でした。それはジンバブエと日本の仕事に対する文化が影響を及ぼす物でした。それまで私は日本の仕事に対する感覚・常識しか持っていなかったため、ジンバブエの仕事文化に戸惑いました。両国の文化の違いを、私なりに下記の表にまとめてみました。

以上、あくまでも私個人の意見です。仕事を進めていくうちに、どうしてもこの意識の違いにぶつかり、うまくいきませんでした。また、相棒との関係においても、どうしても私が仕事を日本のペースで行ってしまうので、私に任せっきりの形になってしまいました。



	日本人	ジンバブエ人
気質	まじめ（几帳面過ぎる）	おおらか（いい加減）
就業時間に対する考え	仕事が残っていたら 当たり前のように残業する	仕事が残っていても 終業時刻でびったり帰る
仕事と自分	会社が アイデンティティ	会社は会社、 自分は自分



私は相棒の仕事に対する姿勢を変えようと悩みましたが、答えは出ませんでした。

仲の良い同僚に悩みを打ち明けると“マサはどうしてそんなに焦ってるんだ？ここは日本じゃないよ”と言われました。私は私が今までジンバブエを日本のようにしようと思っていたことに気づきました。だから、相棒にも同僚にも腹が立ったり、失望感をもったりしたのでしょ。

しかし、ジンバブエ人を日本人のようにすることは無理だと言うことに気づきました。また、私はジンバブエの人や文化を知ろうとする努力が足りなかったことにも気づきました。だから、彼らも日本の文化や日本人である私を知ろうとしてくれなかったのだと思いました。それ以後、私はジンバブエの人を理解するように努めました。そうするうちに次第と相棒・同僚との関係も良くなり、彼らも日本の事に興味をもち、理解してくれるようになりました。そして私は活動をスムーズに行うことができるようになりました。また、私は先述の表での違いが、ジンバブエ特有の物ではなく、世界的に見れば日本の方が特異的という事にも気づきました。

最後にジンバブエでの活動は楽しいこともいっぱいありましたが、腹の立つこともいっぱいありました。しかし、今すべてひっくりかかると、やっぱりジンバブエが好きになりに変わりはないので、やはり自分にとって有意義な2年間だったと確信しています。

平成11年11月01日現在の徳島県出身の派遣中隊員

派遣隊次	氏名	派遣国	職種	出身地
平成9年度2次隊	河野 政己	ネパール	電子機器	美馬町
	笠原 正臣	ニカラグア	診療放射線技師	松茂町
平成9年度3次隊	佐藤 いくえ	ミクロネシア	栄養士	徳島市
平成10年度1次隊	宮本 優子※	中国	日本語教師	阿波町
	山上 恵子	ドミニカ共和国	小学校教諭	鳴門市
	島藤 美絵子	エル・サルバドル	数学教師	徳島市
平成10年度2次隊	戸倉 美菜子	ポリビア	音楽	徳島市
	小出 太郎※	ソロモン諸島	自動車整備	羽ノ浦町
	瀧野 雅子※	ヴァヌアツ	体操	鳴門市
平成10年度3次隊	堀田 直輝※	ジンバブエ	青少年活動	阿南市
	蟹谷 和美	マラウイ	臨床検査技師	上那賀町
	嵯峨山 和美	グアテマラ	野菜	鳴門市
平成11年度1次隊	西條 玉恵※	ザンビア	理数科教師	上板町
	谷脇 新	ザンビア	理数科教師	徳島市
	村井 美帆	エクアドル	卓球	徳島市

合計15人の方々が各国で活躍中です。※印が付いた方は電子メールでの連絡が可能な方です。

堀田 直輝

平成10年度3次隊（阿南市出身）
ジンバブエ派遣中 青少年活動

どうも。ご無沙汰してます。ジンバブエ@堀田です。
お元気ですか？

日本では、そろそろ寒くなってきたと聞きました。季節の変わり目、体に気をつけて頑張ってください。

こちらの方は暑さがついに本格的になり、毎晩寝苦しい夜を迎えています。しかし活動の方は、赴任半年を過ぎて順調と言えるようになってきたと思います。前任者の活動を引き継ぐというかたちで、野球・ソフトボールの普及振興を中心に活動していたのですが、最近はその他にもいろいろと自分の思うような活動に手を広げることもできるようになりました。また、ジンバブエ国内の青少年活動隊員によって進められている、インディアカ普及プロジェクトに関わることになったので、これからは、その方面での活動にも力を入れていくようになると思います。

さて、今回はちょっとお尋ねしたいことがあります。ぼくの母校である四国大学の教授がジンバブエに寄付するスポーツ用品を集めてくれて、それをこちらに送ろうとしてくれています。非常にありがたいのですが、それにはかなりの輸送費用が必要と思われます。単刀直入にお聞きしますが、そのようなことを支援するシステムが徳島県にはあるでしょうか。もしあれば紹介していただきたいのです。お忙しいところ申し訳ありませんが、お願いします。では、今日のところはこの辺で。

追伸

前に言っていた学校とのメールの件、いつでも遠慮なく言ってください。現在、岡山にいる知り合いの学校へ、時折こちらの状況を送っています。その他にも協力できることがあればなんでも言って下さい。なるべくお手伝いしたいと思います。

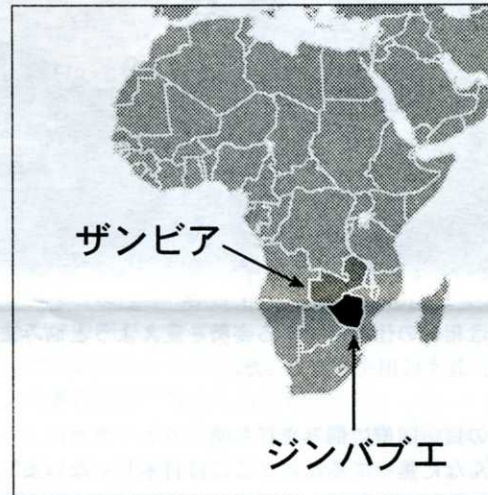
NAOKI HORITA

Japan Overseas Cooperation Volunteers

e-mail:naoki@icon.co.zw

address:JICA Zimbabwe office

P.O.Box 4060, Harare, Zimbabwe



● インディアカとは？



インディアカは、原産は南米・育ちはドイツというインターナショナルなスポーツです。

正式にはコート上で4人对4人でネットをはさみ、バレーボールによく似たルールで、左の写真の「ボール」を打ち合います。

セッターやアタッカーという役割分担もあります。このインディアカボールがあれば、ちょっとした空間で、たとえばハイキングなどにこれを持って行けば、公園や浜辺などで輪になって打ち合うなど、手軽に気軽に楽しめます。手にあたる部分はスポンジですから、バレーボールのような突き指などの心配も少なくてすみます。

近年、子供からお年寄りまで幅広く楽しむことができるスポーツとして日本でも普及し始めています。

(編集者注)

最初、この「インディアカ」という名前を聞いたとき、食用植物（アルファルファなど）の一種かと思いました。インターネット検索サイトで「インディアカ」をキーワードにして検索したところ、日本国内でもすでにいくつかの競技団体が存在し、全国大会なども開かれている様子です。

西条 玉恵

平成11年度1次隊（上板町出身・現職参加）
ザンビア派遣中 理数科教師

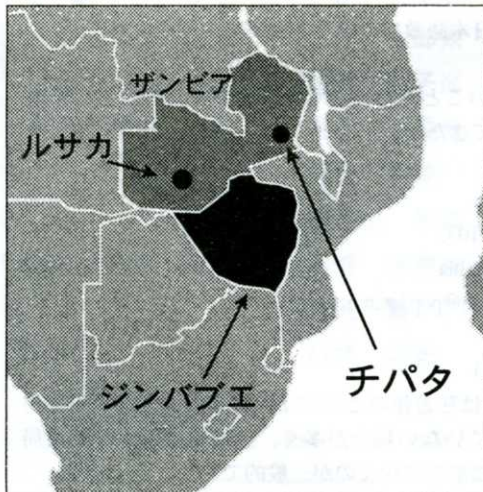
（パート1）

ご無沙汰です。とりあえず無事にチパタについています。ここまでの経緯を話しましょう。

予定どおり、8月16日（月）の午前7時に、荷物を全部持って校長先生と合流しました。そのあと生徒15人ほどと合流して、8時前には出られるかな、と思ったのが大間違い。待てども待てどもバスがこない。11時前まで外でずっと校長先生と話しながら待っていました。引率の先生も現れたけど、どうもチャーターしているはずのバスが、どこかに行っているらしく、私たちはあきらめてルサカ市内までタクシーで出ました。あまり買い物していないとはいえ、何しろあの荷物に加え、蚊取り線香やろ過器など、ごちゃごちゃいっぱいだったので大変でした。

そして乗り込んだのは、ミニバス。チパタまでは8から9時間と聞いていたので、早く出発してほしいけど、ミニバスの鉄則は、乗客がいっぱいにならないと出発しないこと。都合2時間ちょっと、暑いバスの中で待たされました。まあ校長先生たちがいっしょだったので、気分的には安心だったけど、テレビで見るようにバスの上に荷物を載せられて、なくならないかひやひやしてました。出発したのは午後2時過ぎ。それからは、えんえんと東に向かって走っていきました。

アフリカでは想像しにくい、丘あり山ありの、一見日本のような風景の中を走っていきました。最初はとりあえず舗装されている道で「結構いけるなあ」と思っ



ていたのも、ルアングアブリッジまでの最初の5時間。計算では、あと3時間ちょっとかなあ、とたかをくくっていたのですが、そこからの道が最悪でした。時折ガタガタと大きくゆれ、コンピューターが心配なぐらいでした。そして、夜がふけていき、だんだんとあきらめモードに入ったころ、チパタに到着しました。

着いたのは、日付が変わって17日朝の4時過ぎ。やれやれついたらと思ったら、私の家にはまだ誰かいて、同僚の先生のところを間借りするようになっていました。さすがにこれには腹が立ちました。こっちは急ぐから首都ルサカを教師隊員では一番に出発してきたのに、長旅の末にはこの結果。とはいえ、どうしようもなく、ある先生の部屋を一室貸してもらうことになりました。ベッドがなかったので、仕方なくマットだけを引いて寝ました。

後でミニバスでの旅を現地の人に話したら「ほかの手段にすればよかったのに」と言われるほどでした。まあ二度とミニバスでの旅はしないでしょう。なかなかエキサイティングでしたけれども。

家の方も、8月いっぱいの間借り状態でした。そこに同居していた先生の弟とは、よく話をしているいろいろ教えてもらい、カセットデッキも一緒に買いについてもらったりと、世話になりました。彼は、昼間は学校の補習に行っていたので、私は比較的気楽にすごしていました。が、お湯は出ない、台所に電気がない、などでいろいろ不便していました。9月にはいって、世話になっていた校長先生が転勤。でも家に関しては、彼の家が空いたおかげで、一度、また別の家に移りました。そこでは一人暮らしだったけど、広い家に一人で、全然家具のない部屋にいるのは気味悪かったです。早く自分の家に入りたいなあと思っていましたが、結局9月9日に無事引越しを済ませました。それから、水道の問題や電気の問題、ガラスも一枚割れていたし、ばたばたと家の中を片付けていました。すべてがなかなか進みません。とりあえず自分の周りが落ち着けば、ゆったりと楽しみたいと思っています。

私の家は塀で囲まれた校舎内にあります。コンクリート建ての、リビング・キッチン・小さな部屋ひとつと、ベッドルームがある家です。小さな庭もあります。一人暮らしには快適です。冷蔵庫も買ったし、クッカーもあるし、無いのは洗濯機ぐらい。手洗いはつらいし、きれいに洗えているかどうか。もっぱら毎日考えることは何を食べようかなあということ。クッキングブックでも持ってくればよかったと思いました。

